



第2章

II. 到津の森公園の現状と課題

1. 沿革、平成 12（2000）年策定の基本計画について

(1) 沿革

「到津の森公園」の前身は、民間の到津遊園(いとうづゆうえん)です。

到津遊園は、昭和 7(1932)年に当時の小倉市到津の丘陵地に開園されました。しかし、平成 12(2000)年、経営不振により到津遊園は 68 年の歴史に幕を降ろすことになりました。

平成 10(1998)年の閉園決定後、市の当時の人口の約 4 分の 1 にあたる 26 万人の市民、52 団体からの存続を求める声や、北九州市議会での到津遊園の存続に関する全会一致の決議を受け、北九州市が引き継ぐこととなりました。その後、2 年の間、到津の森公園基本計画の下に整備が行なわれ、平成 14(2002)年 4 月 13 日、市民が支える自然の森公園として開園しました。

到津遊園の閉園発表（平成 10（1998）年）からの主な出来事

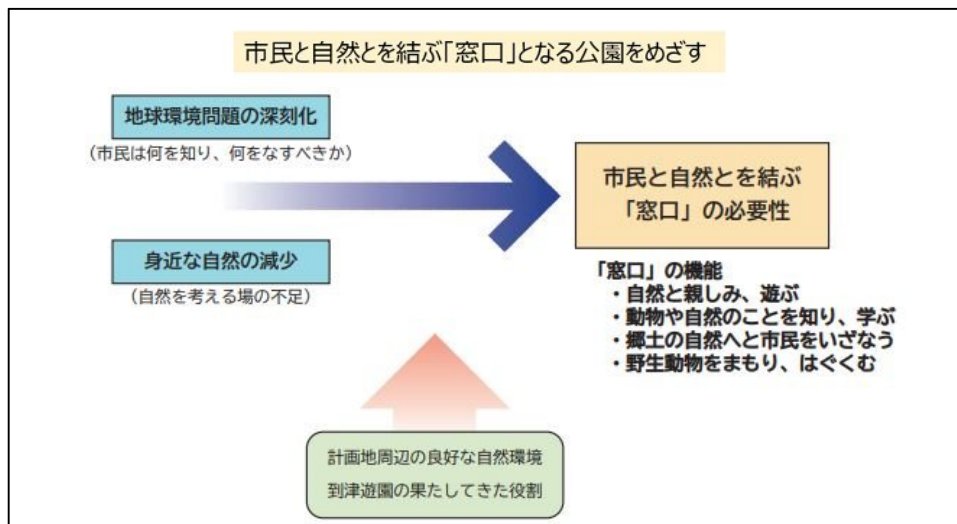
平成10年 4月21日	◇西日本鉄道が「到津遊園閉園」の方針を発表
5月22～23日	◇市民アンケート実施（26万人の存続要望）
6月16日	◇北九州市議会において全会一致で「到津遊園の存続に関する決議」を可決
平成10年 9月29日	◇北九州市と西日本鉄道との間で到津遊園の引継ぎに関する基本合意書を締結
平成12年 1月27日	◇「到津の森公園基本計画」発表
5月 9日	◇到津の森公園の今後の整備の進め方等について発表 ・ 到津の森公園基金への募金の受付開始 ・ 市民ボランティアの募集開始 等
平成13年 10月1日	◇管理運営主体が財団法人北九州市都市整備公社となる
平成14年 1月13日	◇「動物サポーター」「友の会」募集開始
3月31日	◇市民ボランティア「森の仲間たち」発足
4月13日	◇到津の森公園 開園
平成16年 6月21日	◇「到津の森ちからの会」結成
令和 4年11月13日	◇開園20周年記念式典
令和 5年 4月29日	◇入園者数800万人達成

開園から約 20 年を迎えた現在も、自然や動物とのふれあいを通して学習する自然環境教育施設として、多くの市民や企業に支えられています。また、動物の新たな運動場の整備や南側エントランスのリニューアルを行うなど、園の魅力向上に取り組んでいます。

(2) 平成 12 (2000) 年策定の基本計画について

平成 12 (2000) 年に策定した「到津の森公園基本計画」では、基本理念「市民と自然とを結ぶ『窓口』となる公園をめざす」のもと、4つの基本方針「自然環境教育施設」、「市民が支える公園」、「効率的な運営」、「中央公園と一体的な整備」を掲げ、自然や動物、人に優しい公園づくりに取り組んできました。

到津の森公園基本計画掲載の基本理念説明図



[出所]到津の森公園基本計画 (H12 策定)

到津の森公園基本計画掲載の4つの基本方針

1. 自然環境や動物とのふれあいを通じて楽しみながら学習する
「自然環境教育施設」とする
2. 市民や企業などから様々な協力が受け入れられる
「市民が支える公園」とする
3. 良質なサービスを継続的に提供するため
「効率的な運営」を目指す。
4. 県と協議・協力し
「中央公園と一体的な整備」を行う

[出所]到津の森公園基本計画 (H12 策定)

2. 基本方針に基づく取組内容の総括と今後の課題

ここからは、平成 12（2000）年策定の基本計画に掲載されている「4つの基本方針」に基づいて、これまで到津の森公園が取り組んできたことを総括し、今後の課題について検討します。

(1) 基本方針1「自然環境教育施設」について

① 取組内容

到津の森公園では、小学校を対象とした環境学習プログラム、林間学園など、動物や自然との出会い、体験活動等を通じた様々なプログラムを実施しています。

【小学校を対象とした環境学習プログラム】

平成 17（2005）年から、市内及び近郊の小学校を対象に、動物や自然とのふれあいを通して、命の大切さや自然環境の保護・保全の必要性を学ぶ環境学習プログラムを行っています。平成 17（2005）年より延べ 800 校、62,000 人以上の小学生が参加しました。

【林間学園】

子どもたちが自然の中で、自ら学び、自然を愛し、動植物に親しみ、友情を深めながら社会生活を身に付けることを目的とした独自のプログラムを実施しています。

この林間学園は昭和 12（1937）年に全国で最初に「到津遊園」で開催され、これまで7万人以上の子どもたちが参加しており、祖父母から親、子と引き継がれ、多世代にわたり参加する人もいます。令和 4（2022）年度は 229 人が参加しました。参加者アンケートでは、「子どもが明るくなった」、「積極的になった」など高い評価を得ています。



② 取組内容の総括と今後の課題

1) 取組内容の総括

小学校と連携した環境学習プログラムの提供や、80年を超える歴史を持つ林間学園の活動など、自然環境教育施設の役割を十分に果たしてきました。

到津の森公園を積極的に活用し、長期学習プログラムに参加する近隣小学校からの評価は特に高く（令和4（2022）年度に実施したヒアリング調査より）、その要因として、校外学習でしか経験できない体験などの独自のプログラム構成や、緑の多い園内、動物の飼育環境等の良さがあげられています。

2) 今後の課題と対応策

小学生向けの様々な環境学習プログラムを展開する一方、中学生向けなど各学年のニーズを汲んだプログラムの開発が必要です。

また、動物や自然とのふれあいや体験活動を通じた学習は大きな魅力であり、動物福祉に配慮した「動物と人との距離感」を保ちつつ、子どもたちが肌で感じ、身をもって学べる経験のあり方を考えていきます。

さらに、雨天時は学習プログラムの提供が困難であるという課題があり、天候に左右されないプログラムの開発も必要であると考えられます。

今後の課題と対応策（自然環境教育施設）

課題	課題への対応
①小学生向けの様々な自然環境学習プログラムを展開する一方、中学生向けなど各学年のニーズを汲んだプログラムが必要	【教育の継続性】 小学生のみでなく、中学生などに向けた SDGs や園の特性を生かした途切れない教育プログラムの検討
②コロナ禍前に実施していた動物や自然とのふれあいや体験活動を通じた学習は大きな魅力であり、継続、充実させていくことが必要	【ウィズコロナの学習環境】 ウィズコロナを見据え、ふれあい体験などをもとに戻しつつ、動物の福祉にも配慮した学習のあり方を検討
③雨天時にも対応したプログラムが提供できると良い	【雨天対応の学習プログラム】 天候に左右されない学習プログラムの検討など

(2) 基本方針2「市民が支える公園」について

① 取組内容

到津の森公園は、多くの市民・企業・団体が積極的に関わりながら、園の運営を共に行っているという、他の園には無い強い特色を持った公園です。

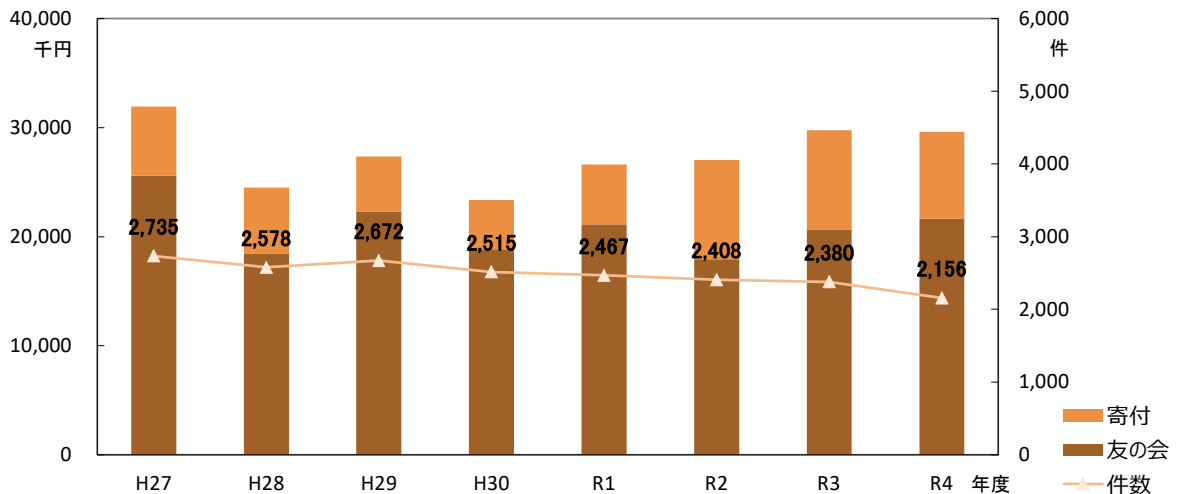
【動物サポーター・友の会等による支援】

到津の森公園では、『動物サポーター』『到津の森公園友の会』『到津の森公園基金』の3つの仕組みにより、動物たちのエサ代等を支援していただいています。

年間3,000万円近くの寄付があり、これまでの累計額は令和4（2022）年度末時点で7億円超となっています。寄付額に増減はあるものの、ここ10年近くは年々増加傾向にあり、多くの市民や団体等に支えていただいていることがわかります。

動物たちのエサ代や園の運営費を市民等の皆様に継続的に負担していただくことで、動物たちの食生活が安定し、いきいきとした姿が見られ、また、園の魅力向上にも大きく寄与しています。

寄付（動物サポーター・到津の森公園基金）と友の会の支援状況
支援金額（左軸）と件数（右軸）



【市民ボランティアの活動】

到津の森公園市民ボランティアは、平成12（2000）年5月に募集を開始し、その後約2年間、動植物に関すること、到津遊園の歩み、植栽方法、飼育の現状把握などを事前に学習した後、平成14（2002）年3月に『森の仲間たち』として、自ら組織を立ち上げ、同年4月の開園以来、本格的な運営、活動に取り組んでいます。

現在は、①飼育、②植物、③動物ガイド、④里山・広報、⑤環境教育の5つのグループに分かれて活動を行っており、どのグループも活動内容を自ら企画・立案し、実施しています。

令和5（2023）年4月時点で、登録人数は120人、平均年齢は65歳です。最高年齢は80代、最年少者は10代と幅広いメンバーで活動しています。

② 取組内容の総括と今後の課題

1) 取組内容の総括

新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、市民が園に参加する機会が減ったものの、市民や企業からの寄付を多く集め、運営への参加も見られるなど、「市民が支える公園」としての役割・機能を積極的に果たしてきました。

2) 今後の課題と対応策

今後も引き続き市民等の皆様や、企業、団体からの寄付を集められるよう、サポーター等の制度の認知度を高め、寄付を増額させていく必要があります。

また、金銭的な支援はもちろん、ボランティア等を通じた金銭以外での市民等との接点を広げていくことで、到津の森公園に関わる関係人口の増加を図ることが重要です。

今後の課題と対応策（市民が支える公園）

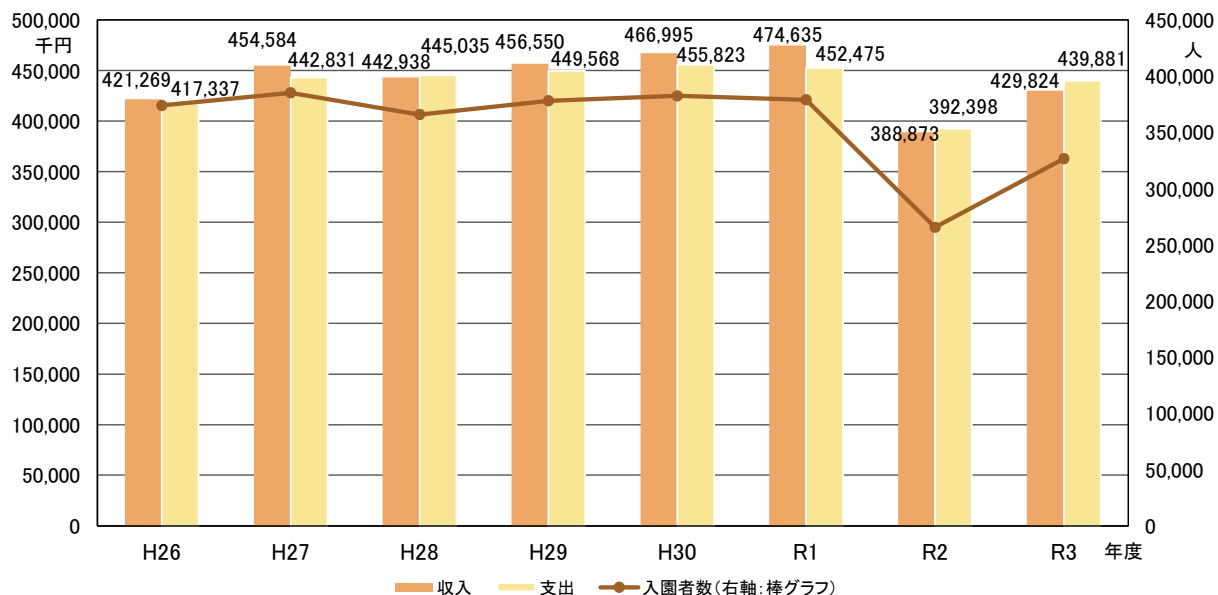
課題	課題への対応
①市民・企業・団体からの寄付に持続性を持たせるために、サポーター制度の認知度を高め、積極的な寄付を募る必要がある	【寄付制度の見える化】 寄付によって動物の飼育や施設整備が賄われていることを可視化し、寄付意欲を醸成する方法の検討
②金銭的な支援だけでなく、園の活動・運営へのボランティア等による参加を通じて市民等と自然との接点（窓口）を広げる必要がある	【参加の間口の拡大】 市民はもちろん、市外の方や出身者も含め、参加に対する接点を拡大し、到津の森への関係人口を増加させる

(3) 基本方針3「効率的な運営」について

① 取組内容

到津の森公園は、平成 18（2006）年から指定管理者制度を導入し、指定管理者（現在は公益財団法人北九州市どうぶつ公園協会）による運営を行っています。

収支の推移（棒グラフ）と入場者数（折れ線グラフ）の関係



運営団体が公益財団法人に移行した平成 26（2014）年度以降の収支をみると、平成 28（2016）年度～平成 30（2018）年度にかけて収支が改善しています。

近年はコロナ禍による入園者減少もありましたが、効率的な運営のための取組ができていたと考えられます。

② 取組内容の総括と今後の課題

1) 取組内容の総括

来園者数については年間 38 万人前後で推移していましたが、令和 2（2020）年度から本格化した新型コロナウイルス感染症により、大きな影響を受けました。

そのような環境の中で、民間活力による遊具施設のリニューアルや管理方法の見直し、動物サポーターや友の会などによる収入確保、光熱水費の削減など、安定的・効率的な運営に努めています。

2) 今後の課題と対応策

新型コロナウイルス感染症の影響で落ち込んだ来園者数の回復・増加に向けて取り組む必要があります。

また、遊具施設の充実、動物サポーター・友の会などの積極的な募集など、一層の収入を確保する必要があります。

今後の課題と対応策（効率的な運営）

課題	課題への対応
①新型コロナウイルス感染症の影響で来園者数が落ち込んでおり、来園者数の回復・増加に向け取り組む必要がある	【来園者数の増加に向けた取組み】 多様な客層に向けたコンテンツ開発、飲食メニューの強化、周辺施設との連携強化、リニューアルした南側エントランスの活用などの取組を検討
②遊具施設の充実、動物サポーター・友の会の募集など、一層の収入確保を継続する必要がある	【収入確保の取組】 遊具施設・動物サポーターなど多様な収入の確保を継続

(4) 基本方針4「中央公園と一体的な整備」について

① 取組内容

平成 12（2000）年に閉園となった民間施設である旧到津遊園を市が引き継ぎ、
到津の森公園として再整備するにあたり、福岡県営中央公園との一体的な整備を
行いました。

①平成 13（2001）年度

北側（中央公園側）から園への進入路となる道路を福岡県が整備

②平成 13（2001）年度

中央公園の一部に、市が立体駐車場を整備

③平成 14（2002）年4月

中央公園の区域に編入

④これらに合わせ、小規模であった北ゲートを改修し、

車での来園者用のメインゲートとした

中央公園（全体図）



② 取組内容の総括と今後の課題

1) 取組内容の総括

開園の際に中央公園区域へ編入しているほか、開園当初のハード整備では、県による園への進入路の整備や、中央公園の一部に北側立体駐車場の整備を市が行うなど、中央公園と到津の森公園との一体的な整備を行っています。

2) 今後の課題と対応策

両公園においてイベントなどの賑わいづくりに取り組んでいますが、情報共有の面などで連携が十分ではありません。福岡県が推進するワンヘルス（人の健康、動物の健康、環境の健全性を一つの健康ととらえ、一緒に守っていく取組み）に関するイベント等、立地特性や環境変化を柔軟にとらえたソフト面での活動連携が必要です。

今後の課題と対応策（中央公園と一体的な整備）

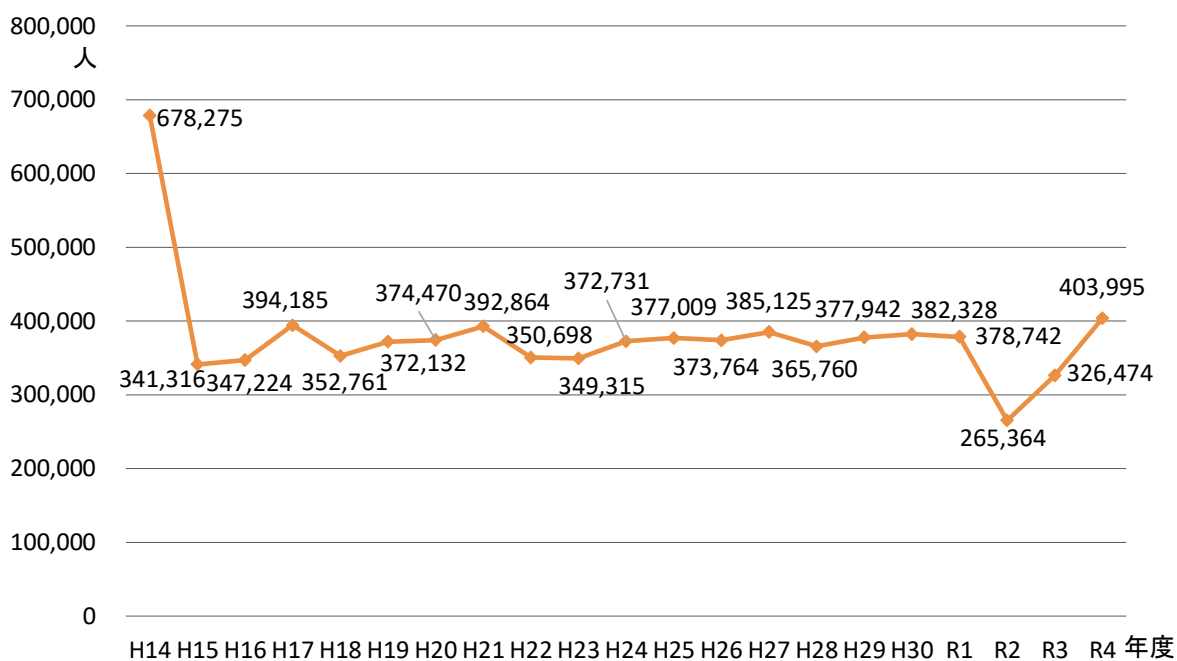
課題	課題への対応
両公園においてイベントなどの賑わいづくりを行っているが情報共有の面などで連携が十分でない	【両公園が連携した賑わいづくり】 イベント情報の相互共有、連携したイベントの実施など

3. 現状と取り巻く環境の変化

(1) 来園者数の推移

来園者数は、開園時に約 68 万人を記録し、その後は 30 万人後半の間を横ばいで推移しています。令和 2（2020）年度～令和 3（2021）年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で急減しましたが、令和 4（2022）年度は開園 20 周年を迎えたことに伴う様々な記念事業を行ったほか、7・8 月に入園料を無料としたことなどから、開園した平成 14（2002）年度以来、20 年ぶりに 40 万人を突破しました。

来園者数の推移



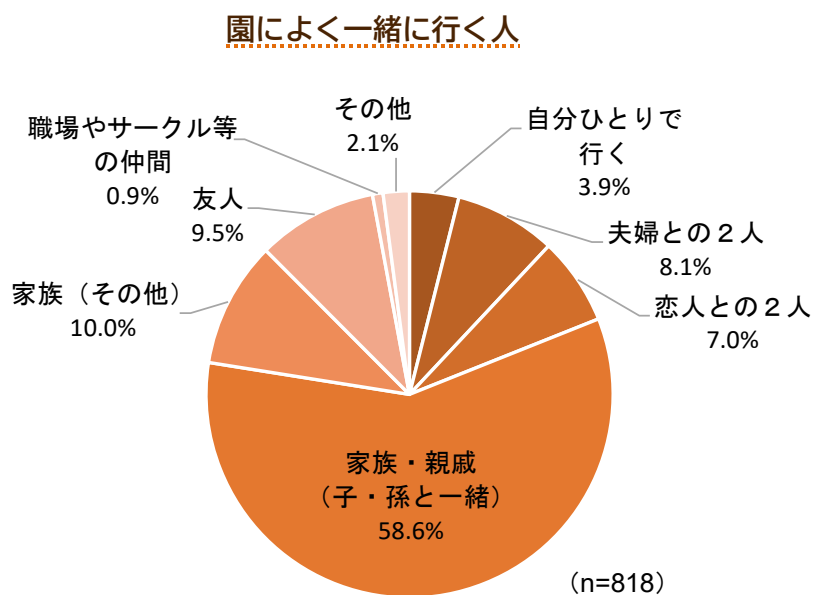
[出所] 到津の森公園管理運営報告

(2) 来園者の属性

家族や親戚での来園者が主ですが、夫婦や恋人、友人どうしで来園する方もみられます。

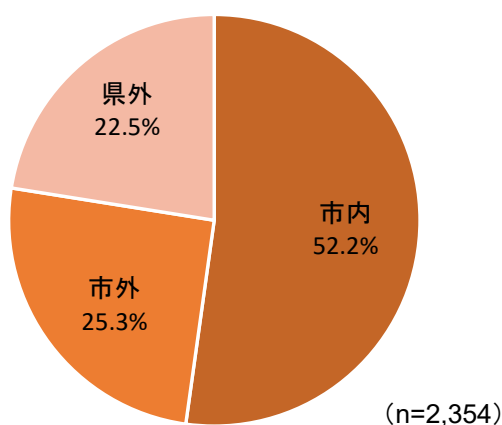
また、新型コロナウイルス感染症流行前の令和元（2019）年度では、50%以上が市内からの来園者で、40%以上が市外・県外からの来園者でした。

このように市内のファミリー層が主な客層ですが、それ以外の多様な客層も一定数を占めています。



[出所] 到津の森公園の将来ビジョンに関する調査（R3）

来園者の居住地（令和元年度）

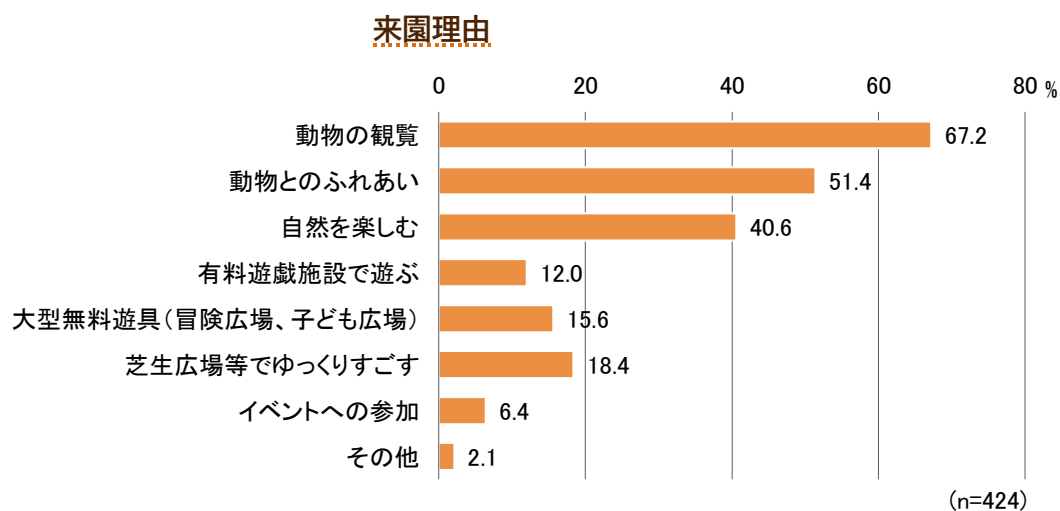


[出所] 来園者アンケート

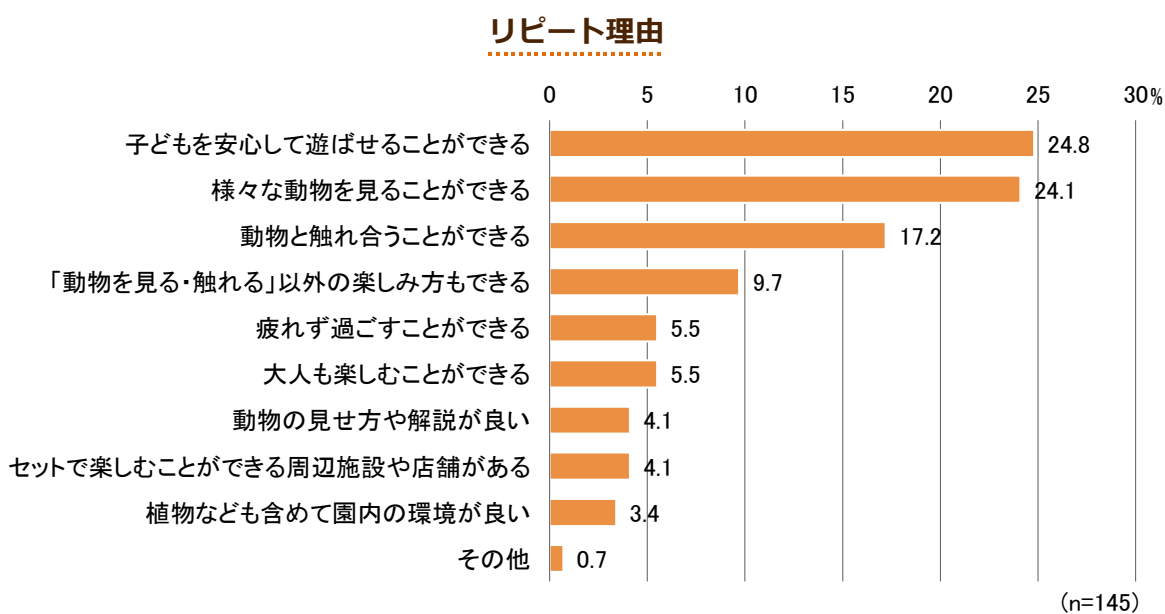
(3) 来園理由・リピート理由

到津の森公園へ来園する理由は、動物を見る、ふれあうといったことはもちろんですが、自然を楽しむや遊具で遊ぶことが目的の来園者もみられます。動物を自然の中でのびのびと飼育していることや、飼育員手作りの案内板なども支持されています。

また、子どもを安心して遊ばせることができる、子どもの好奇心や感性を育てるために適した施設といったイメージも持たれており、繰り返し来園する理由としてあげられています。



[出所]到津の森公園マーケティング調査 (H24)



[出所]到津の森公園の将来ビジョンに関する調査 (R3)

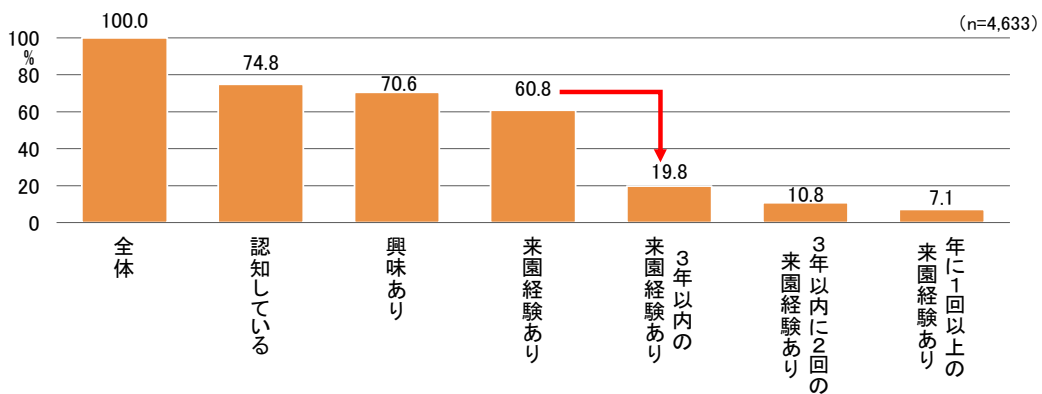
(4) 来園しない理由

令和3（2021）年度に市内及び周辺市町の住民を対象として行った「到津の森公園の将来ビジョンに関する調査」では、「到津の森公園に訪れたことがある人」は60%以上でしたが、「3年以内に来園したことがある人」は20%未満でした。

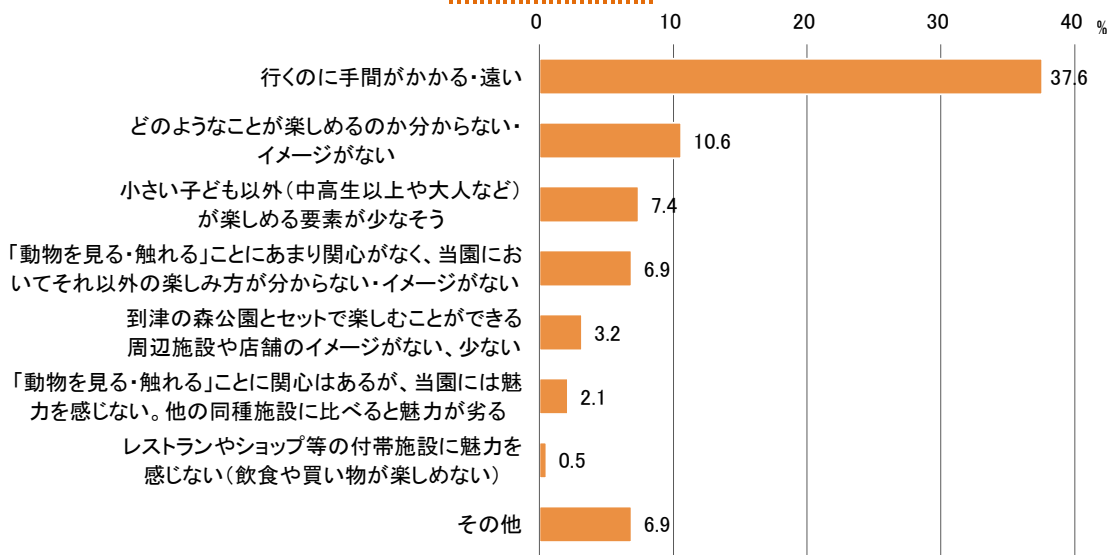
周辺市町の居住者を含む多くの人々が「到津の森公園」を知っており、訪れたことがあるものの、最近の来園につながっていない状況です。この理由として、子ども時代に家族に連れてきてもらったきり足が遠のいているパターンや、自身の子どもが小さい頃に連れて行ったものの、子どもが成長してからは再び来園していないパターンが考えられます。

行かない理由としては、「行くのに手間がかかる・遠い」といったことを除けば、どのようなことが楽しめるのかイメージできない、小さい子ども以外が楽しむ要素が少なそうなど、ファミリー向けの施設である印象が強いことが考えられます。

認知・来園状況



来園しない理由



[出所]到津の森公園の将来ビジョンに関する調査 (R3)

(5) 動物園をめぐる情勢・環境変化

社会情勢や人々の価値観、動物の生息環境の変化等に伴い、動物園が果たしていくべき役割は変わり続けています。近年の変化として、次のようなものがあります。到津の森公園は、これらの変化を的確にとらえて対応していくとともに、来園者等に対して園としての考え方を伝えていきます。

① 動物福祉の向上に関する重要性の高まり

かつて世界中の動物園では、動物をいかに楽しく鑑賞するか、といったレクリエーション的な側面に重きをおいた展示方法がとられており、日本においても同様でした。20 世紀終盤からヨーロッパを皮切りに飼育動物の尊厳や、動物福祉の概念が注目されるようになり、世界動物園水族館協会（WAZA）によって、動物福祉に関する考え方や基準、飼育動物種の考え方等が示されました。現在では欧米諸国はもちろんのこと世界中の動物園で動物福祉への配慮が求められています。

そうした国際的な流れの中で、日本でも公益社団法人日本動物園水族館協会（JAZA）が「適正施設ガイドライン」を作成し、動物種ごとに健全な飼育、福祉を実現するための基準が設けられました。

近年、飼育動物が幸福に暮らすために必要な具体的な方策のことを意味する「環境エンリッチメント」という概念が登場しています。動物同士の空間のすみ分けなどを実際の生息環境に近い形で再現することにより、動物の飼育環境の向上はもとより、来園者も自然環境のすばらしさや多様性、動物と自然との関係を理解できるような展示がこれからの動物園に求められています。

② 生物多様性保全への貢献、研究に関する重要性の高まり

動物園には従来から希少動物の保護のため「種の保存」の役割が求められてきました。世界的に生物多様性が急速に減少している昨今では、この役割はますます重要になってきています。

日本では、平成 30（2018）年に「認定希少種保全動植物園等制度」が創設されるなど、動物園が持つ希少野生動植物に関する環境教育・普及啓発機能や、「種の保存」機能がより注目されています。

また、令和 5（2023）年、国が策定した「生物多様性国家戦略 2023-2030」においても、希少種や絶滅危惧種の保全に対する動物園の位置づけが明記されているほか、自然保護を目的とした国立公園等の保護地域以外の場所で、生物多様性の保全に資する地域の役割を重視する旨が記載されています。

このような流れの中で、種の保全に関する動物園の調査・研究機能は一層重要度を増すとともに、到津の森公園は都市の中の里山として、地域の生物多様性の保全

への貢献が求められます。

地域の自然や生物の飼育・研究に力を入れ、長期的に園の独自性・個性を高めていく視点を持つことがこれからの動物園に求められています。

③ 持続可能な社会の取組に関する重要性の高まり

世界的に気候変動、生物多様性の喪失等、人間の経済活動が要因となった様々な問題が生じています。このような背景から「持続可能な開発」が注目されるようになりました。持続可能な開発とは、「将来の世代のニーズも満たしつつ、現在の世代のニーズも満足させるような開発」と定義され、平成 27（2015）年の国連サミットでは世界全体の目標として「持続可能な開発目標（SDGs）」が採択されました。

本市は、平成 30（2018）年に国から「SDGs 未来都市」に選定され、SDGs を推進するとともに、取組みの成果を発信しています。到津の森公園においても、SDGs の取組みを継続、充実させていく必要があります。

また、人獣共通感染症に対応するために、人と動物の健康、環境の健全性を一体的に守っていくという「ワンヘルス」の理念も重要となっています。

平成 28（2016）年 11 月には、本市でワンヘルスの国際会議が開催され、ワンヘルスを実践段階に進めるとした「福岡宣言」が採択されました。

これを受け、福岡県では、令和 2（2020）年 12 月に、全国に先駆けて「福岡県ワンヘルス推進基本条例」が制定されました。この条例では、人獣共通感染症対策、薬剤耐性菌対策、環境保護、人と動物の共生社会づくり、健康づくり、環境と人と動物のより良い関係づくりといった 6 つの課題に取り組むこととしています。

到津の森公園においても、ワンヘルスの理念のもと、環境保全、人と動物の共生社会づくり等の活動に取り組んでいく必要があります。

また、持続可能な社会の実現のためには、私達一人ひとりが現代社会の問題を自分のこととして捉え、価値観や行動を変えていく必要があります。そのきっかけとなる教育として「持続可能な開発のための教育（ESD）」が重視され、学校教育の中でも取り組まれています。

また、企業等でも近年、環境に対する社会的な責任等が注目されており、環境教育や ESD に取り組むケースが増えてきています。動物園はいきものを通じて、環境問題や持続可能な社会について学び・考えていただける場所であり、これまで以上に様々な人々に対する教育活動に注力していく必要があります。

4. 強みと今後の課題

① 到津の森公園の強み

到津の森公園の3つの強み

◆ 市民が支える公園

動物サポーターや友の会、市民ボランティアをはじめとして、様々なかたちで多くの人々に愛され支援していただいていること

◆ 歴史ある環境教育

環境学習プログラムや林間学園など、自然環境教育を大切にしてきた長い歴史があること

◆ 計画的な森づくり

残してきた森と育ててきた森、街中にありながら自然と一体化した緑あふれる環境であること

市民の強い存続要望のもと、民間所有であった旧到津遊園を市が引き継ぎ、市民が支える公園としてスタートした到津の森公園は、開園以来、「友の会」や「動物サポーター」などの寄付、「市民ボランティア」の活動など多くの市民によって支えられてきました。

市民と自然の「窓口」として、市民に対し、自然や命の大切さ、魅力を伝え続けており、長い間、市民に対する自然環境教育を行ってきました。特に、昭和12(1937)年、旧到津遊園時代に始まった「林間学園」は、他の動物園には例がなく、多世代にわたり愛されてきた歴史ある活動です。林間学園以外にも、子どもたちへ環境学習プログラムを提供するなど、自然環境教育施設としての役割を果たしてきました。

また、園内の森づくりを長い時間をかけて計画的に進めており、市内中心部からアクセスが良い都会の中にありながら、自然に囲まれ、四季を通じた様々な植物とともに動物の表情を感じることができます。まさしく「到津の森公園」の名にふさわしい、緑にあふれる市民の憩いの場となる公園へ育ててきました。

このような特性を到津の森公園の強みと捉えて、今後ますます園の魅力向上に取り組んでいきます。

強み 1

市民が支える公園

市民力

■ 市民ボランティア 「森の仲間たち」

- 開園2年前から準備
- 平成14年（2002年）3月、設立
- 120人の会員が5グループで活動中
 - 飼育、植樹、動物ガイド、里山・広報、環境教育



■ 寄付金等

- 動物サポーター
- 到津の森公園基金
- 友の会
 - 年間 約3,000万円
 - 累計 7億円超

⇒開園当初から、動物のエサ代等の支援

■ 公式サポーターズクラブ 「到津の森からの会」

- 園の存続運動の中心となった団体が集まり、平成16年（2004年）に発足
- 園でイベント開催、
- 「友の会」等の支援など



強み 2

歴史ある環境教育

歴史



■ 林間学園

- 自然の中で学び、動植物に親しむ独自のプログラム
- 旧「到津遊園」時代の昭和12（1937）年から開催
- 累積7万人以上の子どもが参加（三世代にわたる参加者も）



■ 環境学習プログラム

- 小学校を対象に、動物や自然とのふれあいを通じて、自然環境の保護を学ぶ
- 平成17（2005）年から開催
- 累積6万人以上の子どもが参加
 - 令和4年度 45件、2,810人

強み 3

計画的な森づくり

森

■ 長い年月をかけて育てた森

- 開園当初から、たくさんの植物を植え続けている



【現在】



■ 自然のような飼育スペース

- 生息地に合わせた空間づくり
- より自然な動物たちの生態展示



■ まちなかの森

- 街なかにながら、緑があふれる

② 今後の課題

園の課題として次のことが考えられます。今後の社会経済情勢の変化や、動物飼育に関する環境変化等の影響を見定め、これらの課題解決に向けた取組を進めていきます。

1) 強みをいかした運営・集客

課題解決を図るためには、園としての強みとは何かをしっかりと捉え伸ばしていくことが重要です。

強みをいかすことで、到津の森公園ならではのサービスを提供していくとともに、持続可能な園の運営を実現することができます。

また、市民が支える公園のコンセプトを大切に、今後も様々な形で一緒に歩いていくプレイヤーを確保していく必要があります。さらに、魅力的なサービスを提供し続けられるように、人材育成や体制整備等を図っていく必要があります。

2) 環境教育施設としての機能強化

これまで園では、主に小学生や未就学児を対象とした環境教育を積極的に行ってきました。今後は中・高生や大人向けの環境教育プログラムの開発なども求められてきます。

持続可能な社会の実現に向けて、大人も子どもも意識醸成や行動を変えていくことが求められるなか、園としても環境教育プログラムの高度化などをはじめとして、自然環境教育施設としての機能強化を図っていくことが重要です。

3) 多様な客層に向けたコンテンツづくり

現在、小学校低学年や未就学児を持つ子育て層が主要な客層ですが、中長期的には人口減少・高齢化の進行に伴い、来園者数が減少していくことも考えられ、シニア、カップル、友人同士、一人での利用等、様々な客層に対する集客力を高める必要があります。

市の中心部から近い立地や、自然豊かな環境をいかし、周辺の施設と連携しながら、より魅力的で多様なコンテンツ開発を進めることが必要です。

4) プロモーション・コミュニケーションの強化

園として、これまでもホームページやSNS等を組み合わせて様々な情報発信を行ってきました。今後も、さらなる園の魅力を伝えていくため、より一層、効果的な媒体・発信内容を分析し、プロモーションを強化していく必要があります。

また、園として大切にしている動物飼育の姿勢や、園として果たすべき役割、運営にあたっての考え方等を丁寧に伝え、来園者とのコミュニケーションを積極的に図る必要があります。

5) 動物の飼育展示のあり方

動物福祉の向上に関する世界的な潮流の変化を受けて、動物園における動物の飼育環境に求められる水準が高度化するとともに、今後飼育できる動物種が制限されることが予想されます。

今後は、飼育動物にとって生息環境に近く幸せな空間でありながら、来園者にとっても魅力的な飼育展示を実現し、動物も人も幸せである展示のあり方を追求する必要があります。

また、動物福祉に配慮した、動物と人との距離感やふれあいなどを研究し、来園者が楽しめるレクリエーションの機能だけでなく、動物にとっても幸福に過ごせる環境となるよう、動物の福祉に関する理解醸成を図っていくことが重要です。

